

水の文化 温泉の

高揚



ミツカン水の文化センター

表紙上：露天の人気は、衰えることを知らない。生まれたままの姿で自然の懐に抱かれる経験は、他ではかなえられないからなのか。運がよければ、露天の魅力に雪見という福が加わることがある。

表紙下：木材は化学物質による腐食に強いから、今でも温泉地では木桶が健在。

裏表紙上：例年にない大雪の日でも、普段通り麻釜（おがま）に青菜を茹でに来たおばあさん。ここは、かつては麻の茎やアケビ細工に使う蔓を茹でた場所でもある。野沢温泉のアケビ細工は、物産展で何度も賞を取ったほどの出来栄だ。

裏表紙下左：野沢温泉の共同湯では、脱いだ服は棚に入れる。都会の銭湯でも昔は脱衣籠を使っていたが、鍵付きロッカーに変身してしまったのは一体いつごろだったのだろう。

中：野沢温泉の外湯は無料で入ることができる。入口中央に備えられているのは、賽銭箱。使用料としてではなく、感謝の気持ちで、薬師如来に賽銭をあげる。

右：排湯の熱を排雪に利用しない手はないが、周辺への影響を考慮しなければならない。温泉成分によって滑って転倒したり、河川に流れ込んで生態系を崩したりする恐れもある。お湯を直接使うのではなく、熱交換して利用するのが理想的だが、コストが高くなるというデメリットもあって難しい。



神崎宣武「日本温泉文化史」
菊川城司 板寺一洋「地下水としての温泉保全入門」
山村順次「個性ある温泉地に」
今野清十郎「農民の家 鳴子温泉に今も残る湯治の場」
石森秀三「ハッピネスを基準とする維持可能な感幸」
編集部「野沢温泉村の湯仲間と野沢組」
水の文化楽習実践取材
「地域の文化資源を伝える野沢組と道祖神祭り」
野沢美季「女将が守る温泉宿」
古賀邦雄 水の文化書誌「温泉」

水の文化 February 2006 No. **22**

水の文化
2006
22

